

に戻りて、終に直らず。法花経に云はく「此の経を受持つ者を誘らば、諸の根  
 闇く鈍く、矧にして陋く、攀躓盲聾背區にならむ」とのたまふ。また云  
 はく「是の経を受持つ者を見て其の過惡を出さば、もしは実にもあれもしは実  
 にあらざるにもあれ、此の人は現世に白癩の病を得む」とのたまふは、斯れを  
 謂ふなり。當に慎むべし、信ふ心もちて、彼の徳を讃むべし。其の缺を誇ら  
 ざれ。大なる災を蒙るが故に。

沙門眼盲ひたるに因りて金剛般若経を讀ましめて眼を

明くること得る縁 第二十一

沙門長義は、諸樂の右京の薬師寺の僧なり。宝龜三年の間に、長義の眼目闇  
 く盲ひたり。五月ばかりを逕て日夜恥ぢ悲び、衆の僧を屈請へ、三日三夜に金  
 剛般若経を誦誦ましむ。すなはち目開明きて本の如く平ゆ。般若の驗の力其れ  
 大に高きかな。深く信ひ願を發せ。願ひて応へずといふこと無きが故に。

重き斤をもちて人の物を取りまた法花経を写して現に  
 善と惡との報を得る縁 第二十二

他田舎人蝦夷は、信農国小泉郡跡目里の人なり。多く財宝富にして、錢  
 と稻とを出挙す。蝦夷法花経を二遍写し奉る。遍ごとに会を設け、講誦むこと  
 既に了る。後にまた思ひ議りて、なほ心に足らず。更に敬ひて繕写し、ただい  
 まだ供養せず。宝龜四年癸丑の夏四月の下旬に、蝦夷忽率に死ぬ。  
 妻子量りて言はく「丙年の人なるが故に焼き失はず」といふ。地を点めて壑  
 を作り、殯して置く。死にて七日を経て、甦りて告げて言はく「使四人有り。  
 共に副ひ將て往く。初に広き野に往き、次に卒しき坂有り、坂の上に登りて大  
 なる観有るを觀る。是に峙ちて前の路を視れば、数の人多有りて箒をもちて  
 路を掃きて言はく「法花経を写し奉りし人、此の路より往く。故に我れ掃き淨  
 めむ」といふ。すなはち至れば待ちて礼む。前に深き河有り。広一町ばかりな  
 り。其の河に椅を度せり。数の人衆有りて、其の椅を修理ひて言はく「法花経  
 を写し奉りし人、此の椅より度る。故に我れ修理はむ」といふ。到ればすなは

一 妙法蓮華經・譬喻品。取意。  
 二 妙法蓮華經・普賢菩薩勸發品。

第二十一縁 今昔物語集・十四ノ三十三に書承。

三 金剛般若被羅蜜經に、私が須菩提に対して、  
 如來には肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼が有る  
 と、問ひ、須菩提はすべてに有りて答へたこ  
 とがみえる。この經文と本説話の展開とに対応  
 關係がある。  
 四 未詳。本説話以外に所伝をみない。景戒の知  
 友といえようか。  
 五 七七二年。

六 金剛般若經集驗記所収説話には「力」の語を含  
 む表現を有するものが少なくない。「豈非般若  
 力乎」(救護篇)、「信知般若之力不可思議」(神  
 力篇)など。本書でも中巻二十四縁に「被般若  
 力」とあつた。

第二十二縁 善業と惡業についての現報説話。

七 未詳。本説話以外に所伝をみない。万葉集・  
 二十・四〇にみえる国造小泉郡他田舎人大島は  
 同族であろう。  
 八 長野県小泉郡、上田市あたり。  
 九 下巻八縁。  
 一〇 七七二年。

一一 このような信仰の存在は不明。本書では、  
 死骸が火葬されずに保存されたことの理由が記  
 述される説話が多い。遺言(中巻五縁、七縁)、  
 死後の託言(中巻十六縁)、天皇の命令(上巻五  
 縁)、裁判のため(下巻二十三縁)などであるが  
 中国説話の世界に広くみられる、体がまだ温か

かつたので葬らなかつた(たとえば広記・三八  
 二・程道惠「心下尚暖、家不廢殮」)という理由  
 のものはみえない。  
 三 墳墓をつくつて葬つた。底本訓釈「冢」皮比  
 也乎。「殯」を、諸注は「もがり」と訓み「葬」  
 の前段階のように解するが、疑わしい。賊盜律  
 およびその疏では、「殯」はその次の段階に「葬」  
 を予想してはいない。墳墓をつくりその中に収  
 める、というかたちで葬ることを「殯」というの  
 であらう。

三 冥界で、はじめに野があり次に坂を登る例  
 に、法苑珠林・破戒篇・感応縁所引冥祥記・智達  
 「四望篇」目、但親・荒野・途徑銀危、示道登  
 臨」がある。

四 冥界で、坂を登る例に、法苑珠林・六度篇・  
 懺悔部・感応縁所引冥祥記・慧達「行路転高、  
 同・六度篇・精進部・感応縁所引冥祥記・僧規行  
 至」一山二がある。

五 石長和の説話(たとえば法苑珠林・六度篇・地  
 獄部・感応縁所引冥祥記)には、冥界の道を進む  
 石長和の前を五十歩はなれて二人の「治道」道  
 路を修理する者が進み長和ひとり「平道を  
 行く」という記述がある。

六 法苑珠林所引冥祥記・石長和に「仏子独行大  
 道中」、同・破邪篇所引冥祥記・程道惠に「仏弟  
 子行路、修福人也」とみえる。いずれも平坦  
 本道を進んでいる。

七 原文(即至)。至ると同時に、の意。  
 八 一町は一〇六丁余。河幅が一町。そこにか  
 かる橋は当然ながらそれより長い。広い河にか  
 かる長い橋。異様なイメージである。

九 冥府に至る途次に「橋」を渡る例に、西陽雜  
 俎・二・趙業、金剛般若經集驗記・神力篇・僧清  
 虛・方歲通天元年十月二十三日条、などがある。